

主 題：神を知ることの喜び

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章7-11節

私は最近、神を知っていることの意味について考えました。今日は皆さんとごいっしょにそのことを聖書から学んで行きましょう。初めに、マタイの福音書7：22-23を見てください。「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』：23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」。日々の信仰生活にあって、時々罪を犯すことがあると自分の信仰がどのような状態かを考えます。23節に『わたしはあなたがたを全然知らない。』とありますが、これは非常に怖いことばです。この「知っている」ということばはどういう意味でしょう？英語では「神を知っている」という表現はよく使います。この22-23節に記されているように「大ぜいの者」たちは、主のために一生懸命奉仕したけれど、彼らはイエスのことを知らない、そして、イエスから『わたしはあなたがたを全然知らない。』と言われます。だから、「知っている」ということばは大切です。私がテニスが好きなのは皆さんよくご存じでしょう。テニスをするのはもちろん、テニスを見ることも好きです。だから、私はテニスのプロ選手のことをよく知っています。たとえば、ある選手の服がどのメーカーのものか、彼がよく使うラケットはどの会社のどのモデルか、そして、プレーするスタイルもよく知っています。また、どこに住んでだれと結婚しているか、どのような考え方、どのような気持ちでテニスをしているのかも知っています。先日あるスポーツ店でテニスのビデオを見る機会がありました。そこで昔の古い試合のビデオを見てとても楽しかった、昔の友だちに会ったような気がして、ああこの試合は知っていると思いながら見ていました。でも、もし、道でその選手に出会ったとしても彼は私のことは知りません。教会の中でももし同じことがあるなら怖いことです。だから、「知っている」ことは大事なことです。

今日のメッセージによって、皆さん一人ひとりが自分自身のことを考えてください。自分が救われているかどうかではなく、毎日どのように生活するのかを考えて行きましょう。「知っている」ということばにはいろいろな意味があります。創世記4：1には「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言った。」と、これは非常にあたたかく深い意味があり「知っている」ことの一つ深く強い関係です。私たちは神と私自身の個人的な関係を考えたときこのようでしょうか？まず、イエスに対して私は救われているかどうか、そして、イエスを知っているなら毎日何をするのか、何をするべきなのか、自分のことを吟味しなければいけません。私たちがどのように生活するのは私たち自身の責任です。Ⅱコリント13：5を見てください。自分を吟味しなさいと教えられている箇所です。「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか。——あなたがたがそれに不適格であれば別です。——」。

では、ピリピ3：7-11を見て行きましょう。ここから私たちが学ぶことはキリストを知ること何よりもすばらしいことであること、そして、パウロはキリストを知ろうと強く願い続けることを私たちに勧めているのです。私たちも彼の考えにならって同じようにしましょう。ここに、三つのポイントがあります。

1. 神のすばらしさを知ること 7-8節
2. キリストを知ることを通して義が与えられること 9節
3. 神をより深く知ること 10-11節

ひとつずつ見て行きましょう。

☆神を知ることのすばらしさ

1. 神のすばらしさを知ること 7-8節

3：7-8「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、」、神のすばらしさを知ることから学びましょう。マタイ13：44を見てください。「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」、この人にはその宝を見つけるまで別の大切なものがありました。宝が見つかったとき、持ち物を全部売り払ってその宝が隠された畑を買うというのです。同じことをパウロは7-8節で述べています。かつてのパウロが宝としていたもの

は3：4-6に記されています。「ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。：5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」、イスラエル民族は神に選ばれた特別の民族でしたから、イスラエル人であるパウロにとってそれは宝でした。そして、「ベニヤミンの分かれの者」と特別の出身であると言い、律法において彼は足りないところはなかったと書かれています。これらはユダヤ人として優秀であることを示し、パウロにとって得であったのです。けれども、7節で得であったそれらのものは損になったとあります。この「得、損」というのはビジネス面でのことばで、お金を得るなら得、失うなら損という状態です。だから、パウロにとってユダヤ人として得であったものは損と思うようになったと言うのです。7節に「このようなもの」とあるのは4-6節に書かれているユダヤ人としての特権のことです。8節には「いっさいのこと」とあります。得であった「このようなもの」はすべてではありません。けれども、損となったのはすべてのものだと言うのです。パウロがかつてもっていたユダヤ人としての優秀さだけでなくパウロのすべてが損となったと。そして、7節の「思うようになりました。」は過去形ですが、8節の「思っています。」は現在形、継続していることを表わします。この違いは大切です。ですから、私たちが考えなければいけないことは、私たちにとってかつての宝物は何だったかということです。7節で教えていることは、かつて宝としていたその考え方はもう終わったが、それらを損と思うことは心で決めたこと、ずっと継続しているということです。これはパウロにとって非常に大きい変化です。向きが変わったのです。前はサウロというパリサイ人でしたが、今は、イエスの弟子です。前はユダヤ人として律法を守っていることのプライドがありましたが、今のパウロのプライドはイエス・キリストです。かつてクリスチャンを迫害していたパウロはイエスを嫌っていたかもしれませんが、今はイエスを愛しています。

では、なぜパウロはこのように変わったのでしょうか？パウロはイエスのすばらしさを知ったから、かつての宝を捨てたのです。「すばらしい」というのは「よりすばらしい」「何よりすばらしい」という意味です。パウロは価値がないものを捨てて、とても大きな価値あるものを得たということです。150年前、カリフォルニア州ではあちらこちらの川の中で、山で金が見つかりました。その時は皆捜しました。でも、偽物の金がありました。専門家が見なければ違いが分からないほど同じように見えました。ある人が金を見つけて喜んで売りに行って、それが偽物だと分かったらそれを捨ててさらに本物を見つけようとします。見つかるこそ大喜びです。それと同じことです。パウロは本物が見つかったとき大事だと思っていたものを捨てることに何の躊躇もありませんでした。私たちが考えなければいけないことは、私たちが本当にイエスのすばらしさを分かっているかどうかです。私たちがイエスのすばらしさを真に理解できたなら、以前の宝は捨てるのが容易いのです。「知っている」ということは、事実だけでなく経験によっても分かるということです。神を自分との関係において「知っている」と言えるのです。私がイエスを「知っている」というのは名詞ではなく動詞です。「知っている」ことは行なうこと、日々実行することです。私たちがイエスと個人的な関係ができれば、毎日、イエスと歩むことです。ゆえに、キリスト教は他の宗教と全然違うのです。神との個人的なつながりを持つことができるのです。あまり宗教ということばを使いたくありません。なぜなら、宗教とは人間が作ったもの、人間の側から神を作ろうとするからです。パウロはイエスとの個人的な関係ができたことによって、以前のものを捨てることができました。そして、パウロはその捨てるものを非常に汚いことばを使って表現しています。「ちりあくた」ということばを私たちはあまり使いませんが、これは汚いもの、たとえば、赤ちゃんのおオムツの中に見るもの、また、食べ物が時間を経て腐敗してしまった状態です。ある人はなぜこのような汚いことばを使うのかと疑問をもちますが、パウロはこのように強いことばを使って、イエス以外はそういうものだと強調しているのです。私たちはどうでしょう？イエスを信じたときに一人ひとりこの変化を経験しましたが、私たちは日々の歩みにおいてそれを選択しているのでしょうか？イエスと毎日ともに歩んでいること、だから、キリスト教が他の宗教とは違うのです。時々、私のところにもエホバの証人の人がやって来ますが、彼らはイエスは神ではないとしています。いろいろな働きをして一生懸命話をしていますが、実は、神を知らないのです。悲しいことです。神との個人的なつながりをもつことができること、それがキリスト教です。神と私との個人関係が作れることです。パウロは以前イエスを信じていなくてもその事実は知っていたでしょう。でも、ある時イエスがサウロの名を呼んで、恵みによってパウロは自分の罪が分かりイエス・キリストを救い主と信じました。そこからパウロはイエスとともに歩み、すべてのものを捨てたのです。それは簡単なことではなかったでしょう。でも、イエスのすばらしさが分かったからパウロは喜んで捨てることができましたのです。パウロのこの選択を私たちも考えましょう。

「それは、私には、キリストを得、」と続いて書かれています。大きな価値のものを捨てて、しかし、そ

れよりももっとすばらしい価値あるものを得たと言うのです。イエスが「持ち物を全部売り払ってその畑を**買います**」とたとえて話しておられる通りです。イエスを知っていることのすばらしさに比べたら、昔の宝物は「**ちりあくた**」と見なして捨てることは易しいと。私たちはこの経験があったかどうかを考えなければいけません。皆さんどうですか？この経験をしたならその後、毎日どのように選択して歩んでおられますか？もっと神を知ろうとしていますか？もっとイエスを愛して行こうとしておられますか？どのようにイエスを愛するのか考えていますか？私たちは口ではよく言います、正しいことはこうでしょう？知っているよと。しかし、心の中で本当に知っているかどうかを考えるべきです。他の人は私たちの生活を見てイエスを信じていることが分かるのでしょうか？私たちが本当にイエスを信じてその変化によって歩んでいるなら、周りの人には分かるはずですが。私たちはイエスの価値が本当に理解できたかどうかを考えなければいけません。分かったなら私たちはなぜ罪を犯すのでしょうか？罪は神を喜ばせないで他に別のことを捜します。神より他のことによって満足を得ようとするから罪を犯すのです。神のすばらしさが本当に分かったなら、私たちは神によって満足します。神の充分性が本当に理解できているかどうかを考えるべきです。

2. キリストを知ることを通して義が与えられること 9節

9節「**キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。**」、初めのことばは大切です。「**キリストの中にある者と認められ**」ということばは聖書の中によく見られます。これはパウロの目的で、イエスとひとつになることです。イエスの死を通して、イエスのよみがえりを通して、イエスと同じになること、ひとつになることです。その関係は深いのです。イエスのよみがえった力が私たちの中にあることを知ること、それがパウロの目的でした。今朝、皆さんはどこにおられますか？私たちはキリストの中にある者と認められること、それは日曜日だけのことではありません。私たちがもし日曜日のマスクを着けているならそれは危ないことです。毎日、キリストの中にあると認められること、それが私たちの願いです。次に「**義**」について、教会以外でこのことばはあまり使いません。「**義**」とは正しさ、神の前に立つことができることです。パウロはまた以前のことを思い出して「**律法による自分の義ではなくて、**」と言っています。パウロは「**義**」をもっていると思っていました。正しいことを行なうこと、神のみことばを守ること、それは大切なことです。ピリピ3：6に「**その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。**」とありました。パウロはそれが大切だと思っていました。パウロがもっていた義は与えられた義ではありません。以前もっていた宝です。しかし、それは人間的な努力、行ないです。多くの宗教は人間的な行ないによって大丈夫とされますが、キリスト教はあくまでキリストとの個人的な関係です。私たちもイエス・キリストを信じる前はそれぞれに自分の律法があったかもしれませんが、でも、それは神の義ではありません。人間は自分一人の力で神を喜ばせることはできません。何をしても、どのような働きをしても神の正しさに届くことはできません。私たちに恵みが必要です。それが神の律法の目的だったのです。律法の目的は、私たちが神の律法を守ることができない、そのために恵みが必要であることを分からせることです。ですから、パリサイ人たちは分からなかった、最初から間違っていたのです。恵みではなくて自分の働きだったからです。それなら他の宗教と何ら変わりません。ガラテヤ3：21-24を見てください。ここから神の律法の本当の意味が分かります。「**とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。：22** しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。：23 信仰が現われる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。：24 こうして、律法は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」、24節に「**律法は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係**」とある通りです。律法によって私たちに神の恵みが必要であることが分かるのです。

「**義**」という漢字を見てください。上の部分は「羊」、ひつじです。下の部分は「我」、自分のことです。おもしろいです。イエスは神の小羊です。ということは、私たちが導く羊、私たちが神である羊が守り養うから私たちに神の義があるという意味です。「**義**」はイエスが私たちのために十字架にかかって私たちのために死んでくれたこと、私たちの罪をイエスが全部取ってくれた、その代わりに、私たちがイエスのすばらしい正しい義が与えられることです。私たちがイエスを知ることによって義が与えられるのです。イエスを知ることによって与えられる喜びが分かりますか？罪がなくなる、これは神がくださる義、自分のもっている義はいらないのです。キリストを信じる信仰による義ということです。その元は神です、私たちの行ないは関係ないのです。どんなに一生懸命でも私たち自身では義に至りません。私たちが神からの義がなければ本当に義はないのです。律法から来る義ではなくイエスから来る義

が必要なのです。本当にイエスを知っているということが私たちに義があるということです。

3. 神をより深く知ること 10-11節

10-11節「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」、同じように初めの部分「私は、キリストとその復活の力を知り」は、またパウロの目的です。私たちがより深く理解するためにパウロはこの目的を繰り返して述べるのです。そして、二つのことによってその目的を説明しています。(1) 復活の力を知ること、「力」は神の強さです。神の全能の力です。この力があるからイエスはよみがえることができました。だから、私たちが救うことができるのです。それだけではなく、(2) キリストの苦しみにあずかること、だれも苦しみを経験したくはありませんが、パウロはキリストのことがよく分かって、そのよみがえられた力が分かったから、イエスに似たものになりたかった、イエスを深く知りたかった、その意味でキリストの苦しみにあずかりたかったということです。そして、さらに「**キリストの死と同じ状態になり**」と言っています。それによって、神の力によってパウロはもっとイエスに似た者になることを願ったのです。ですから、パウロは苦しみも経験しながらキリストに似た者になること、それがパウロの強い願い、望みでした。私たちももっとイエスを知りたいなら、もっと時間を取って、いっしょにみことばを読み話すことが必要です。でも、私たちが本当に神の子どもなら私からの説明は必要ありません。神との個人的関係ができたなら、それらは自然にできることだからです。たとえば、結婚している人は昔を思い出してください。つき合いが始まったときはいっしょにいることがとても楽しかったでしょう？ある人からのこうすればいいとかのアドバイは必要ありませんでした。すべて自然にできました。同じことです。個人的関係ができてからです。私たちはイエス・キリストと個人的関係ができたのです。でも、あえて言うなら、私たちはイエスと個人的な霊的關係ができたなら何をするのか、聖書を読むこと、暗唱聖句をすること、読むだけでなく、その意味は？私との関係はどう？と深く学ぶこと、それは神とのコミュニケーションです。そして、祈ること、皆さん、祈っていますか？それは神と話すこと、神とともに歩むことです。神に信頼して、どのように歩むのか、明日はどうしよう？こうすればいいかな？と全部神と話しながら、考えながら…。病気になって神を信頼することは神との個人的関係があるなら当然です。私たちがみことばを聞き、聖書を学んでも、はい、終わり！では意味がありません。取ったノートをまた見て考えて祈って、だから明日どうするのかを考えるべきです。知識が与えられて、その知識がどのように知恵になるのか、そのプロセスがとても大切です。でも、多くのクリスチャンの弱いところ、足りないところはもらったものの適用です。どのように使うのかです。実践が大切です。そして、交わりも大切です。必要です。霊的な会話は個人的な関係ができたなら自然に出てくるはずですが、もし、そうでないなら、その個人的関係ができていないか、弱いかを考えなければいけません。私たちが自分よりも成長している人と話して、私はこのように考えているけれど実際にどうすればいいのでしょうかと、アドバイスをいただいて成長することもできます。また、自分より弱い人を手伝い、励まし、いろいろなことを教えることも私たちが成長させます。これらは私たちがイエスと個人的関係ができていながら、教えるはず、習うはず、当然することです。弟子訓練ということです。

皆さんはイエスとこの個人的関係ができていのでしょうか？今日は自分のことを考えながら自分の責任、考えるべきことを見てください。神のすばらしさを知ること、イエスを知ることを通して義が与えられること、神を深く知ることを通して学びました。最後にみことばを見ましょう。黙示録2：1-7です。「エペソにある教会の御使いに書き送れ。「『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。:2 「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。:6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。:7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』」、大切なところは特に4節で、私たちが一番愛していた人を私たちが忘れてしまったことです。前の宝をもう一度思い出して、それはどのように得だったでしょう。それはもうあなたにとって損と思うようになりましたか？本当に心の中でイエスが何よりもすばらしいことが分かりましたか？そして、分かったから毎日そのように考えていますか？私たちはイエスのことを知っていますか？